

I 導入部

おはようございます。4月の第四日曜日を迎えました。今日も皆さんと共に私たちの救い主イエス様を賛美し礼拝できますことを感謝致します。今日は午後から教会総会が行われます。2026年度の主題、教会標語は、「**イエス様の愛に触れて変化する**」で、聖書の言葉は、コリントの信徒への手紙第二 5章 14節の「**なぜなら、キリストの愛が私たちを駆り立てているからである。**」というみ言葉です。パウロ自身がイエス様の愛に駆り立てられて、迫られて宣教の働きに命を懸けて歩んだのでした。イエス様の愛がパウロを駆り立てたように、イエス・キリスト様の愛は私たち一人ひとりにも強く迫っているのです。

今日の礼拝の箇所は、このみ言葉を含みますコリントの信徒への手紙第二、5章 11節から 15節で、「**キリストの愛接近中**」という題でお話し致します。

II 本論部

一、コリント教会のパウロに対する疑惑

パウロはコリントの教会を創設し、約1年半にわたってコリントの教会を指導しました。コリントの町は当時、商業都市として栄えていました。経済の繁栄の裏では、貧富の差が生じていました。コリントの人口の三分の二が奴隷であったようです。コリントには、ギリシャ神話の女神アフロディーテーの神殿があり、約千人もの神殿娼婦が存在していたようです。ですから、コリントの町は性的な乱れがありました。コリントの教会の中にも影響があったのです。コリントの教会は、様々な問題が起こり、パウロはコリントの教会に宛てた手紙を書きました。第一の手紙は、教会内で発生した様々な問題に対して、キリストの福音を通して語る様子がかがえます。第二の手紙は、パウロ自身に問題の焦点が当たっているために、パウロに対する誤解を解く内容になっています。1つの指摘は、パウロは肉体が弱く、パウロの説教からは何も得るものがないという批判でした。「わたしのことを、「手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」と言う者たちがいるからです。」(10:10) とパウロは言っています。リビンググバイブルには、「パウロの手紙なんか気にするな。偉そうなことを言っても、口先だけさ。実際に会ってみればよくわかるよ。いかにも頼りなげで、あれほどへたな説教者はいないな。」とあります。衝撃的な内容です。牧師にとって一番つらくて落ち込むのは、「**先生の説教はつまらない。わからない。**」ということでしょう。牧師たちは、「**パウロもそうだったのか**」と変な安心感があるのかも知れません。2つ目の指摘は、今はコリントを離れているパウロが、コリントに訪問すると言いながら、なかなか訪問しない。つまり、約束を守らない。信頼できないという指摘でした。3つ目の指摘は、献金を集めているが、横領しているのではないかという献金に対する疑惑の指摘。その指摘に対してパウロは、「わたしたちに心を開いてください。わたしたちはだれにも不義を行わず、だれをも破滅させず、だれからもだまし取ったりしませんでした。」(7:2) 「わたしが負担をかけなかったとしても、悪賢くて、あなたがたからだまし取ったということになっています。」

(12:16)と語ります。4つ目の指摘、これは最も大きな指摘ですが、パウロが本当に使徒なのか、使徒と自称しているだけではないのかという指摘。使徒として認められるのは、2つの条件がありました。1つ目の条件は、イエス様と共に様々な出来事を経験し、共に福音を伝えながら生活した人であること。2つ目の条件は、イエス様が十字架につけられた後、復活したイエス様を直接目撃した人であることでした。パウロは、この2つの条件を満たしていませんでしたし、パウロはキリスト者を迫害していたというレッテルがあり、使徒として疑わしいと思われていたのでしょうか。コリントの教会は、パウロが開拓し、建てた教会ですから、パウロにとっては他の教会よりも強い愛着がありました。パウロにとって、他の教会はともかく、コリントの教会、コリントの信徒の人々からは最も信頼されたいと思っていたはずでした。そのコリントの教会、信徒からパウロは誹謗中傷を受けたのです。パウロは、コリントの教会、信徒の人々に、パウロ自身がイエス様に選ばれた者であることを証明していくことになるのです。

二、パウロは自分のありのままを知ってほしい

11節には、「主に対する畏れを知っているわたしたちは、人々の説得に努めます。わたしたちは、神にはありのままに知られています。わたしは、あなたがたの良心にもありのままに知られたいと思います。」とパウロは語ります。リビングバイブルには、「ですから、私たちの心には、いつも主を恐れかしこむ厳粛な思いがあります。それで、ほかの人々を説得しようと、やっきになっているのです。それが純粋な気持ちから出ていることを、神様はご存じです。だから、あなたがたにも、このことをはっきり知っていただきたいと、心から願っているのです。」とあります。11節の言葉は、前の10節につながっています。「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」リビングバイブルには、「なぜなら、やがて私たちはみな、キリスト様の前で、さばきを受けなければならず、全生活がさらけ出されることになるからです。善であれ悪であれ、地上の体でいる時の行ないに応じて、私たちはそれぞれ、ふさわしい報いを受けるのです。」とあります。パウロは、キリストの裁きの座に立たされるという恐れを知っているのです。パウロは常にこのことを思いながら人生を生きました。パウロがここで言おうとしていることは、イエス様の恐ろしさではなくて、むしろ畏敬と敬虔な畏れです。ヨブは「主を畏れ敬うこと、それが知恵、悪を遠ざけること、それが分別。」(ヨブ記28:28)と言いました。箴言には、「主を畏れることは知恵の初め。」(箴言1:7)とあります。12節には、「わたしたちは、あなたがたにもう一度自己推薦をしようというのではありません。ただ、内面ではなく、外面を誇っている人々に応じられるように、わたしたちのことを誇る機会をあなたがたに提供しているのです。」とあります。リビングバイブルには、「またもや、私たちが自己推薦を始めたと思いますか。そうではありません。ただ、あなたがたに手ごろな武器を供給しようとしているのです。この武器があれば、外見のりっばさと説教のうまさとを誇りながら、その実、心の中は偽りと不誠実で満ちている説教者に対抗できます。少なくともあなたがたは、私たちの動機が正しく、しかも誠実である点を誇る事ができるのです。」とあります。パウロは、自分のありのままを知ってほ

しいと願ひ、彼自身の誠実さを分かってほしいと願ひます。パウロは、神様の目から見れば、自分の手は聖く、動機は純粋であることを疑ってはいません。しかし、コリントの教会の人々は、パウロを疑惑の目で見ています。だから、パウロは自分の潔白を証拠立てたいと願うのです。自分の人格が疑われれば、自分の伝えるメッセージの効果は損なわれます。人の伝えるメッセージは、いつもその人の人格との関連において聞かれるものなのでしょう。13節には、「わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。」とあります。リビングバイブルには、「自分のことをこのように言うとは、気が狂っているのでしょうか。もし気が狂っているとすれば、それは神様の栄光のためです。もし正気であるなら、あなたがたのためです。」とあります。パウロは、自分の行動の奥にある唯一の動機は、神様に仕え、コリントの教会の人々に仕えることだけだと強調しています。パウロの熱心さが正気でないと思われるほどのものだったのでしょう。イエス様も気が変になっていると言われていました。「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。」(マルコ 3:21) パウロは気が変になっていると言われるほどに、他の人と比べると熱心に大胆に福音を伝えたのでした。日本でクリスチャンであるということは、気が変になっていると言わなくても、何か他の人と違うというような意味合いがあるように思うのです。

三、パウロに示されたイエス様の深い愛

パウロの言葉や行動が、他の人と比べて熱心であり、大胆であるという生き方がどこから生まれてくるのかというのが14節です。「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだこととなります。」「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている」というのです。「**駆り立てる**」という言葉は、「**強く迫ってくる**」という意味を持ちます。パウロは、キリストの愛を実感するとか、キリストの愛に感動するという弱いものではなくて、キリストの愛が駆り立てる、強く迫っているという事実なのです。キリストの愛を実感しようが、実感しまいが、キリストの愛に感動しようが、しまいが、それにかかわりなく、キリストの愛がパウロ自身に強く迫ってきたという事実なのです。このキリストの愛は、「一人の方がすべての人のために死んでくださった」という事実に基づくものです。イエス様の十字架の死、全ての人のために十字架で尊い血を流し、命をささげられたという事実が、パウロの「**キリストの愛がわたしたちを駆り立てている**」ということの理由です。使徒言行録9章にはパウロの回心の記録があります。パウロはかつて、クリスチャン迫害者の一番の立役者でした。イエス様の弟子たちを脅迫し、殺そうと生きこんでいました。クリスチャンを見つけると容赦なく捕らえました。パウロは、ダマスコにいるクリスチャンを捕えるために、諸会堂あての手紙を求め、ダマスコに向かう途中に、天からの光を受けパウロは地に倒され、「**サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか**」と呼びかけるイエス様の言葉を聞きました。パウロが「**主よ、あなたはどなたですか**」と問うと、「**わたしは、あなたが迫害しているイエスである。**」と答えられ、ダマスコの町に入るとなすべきことが知らされると聞かされまし

た。パウロは、何も見えなくなり、三日間、目が見えないで、食べることも飲むこともしませんでした。神様は、ダマスコに住むアナニアにパウロの所に行って祈るようにと示されました。アナニアがパウロは、「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています」と答えると、神様はアナニアに、「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」と言われ、アナニアはパウロを訪ね、手を置いて祈るとパウロは見えるようになり、バプテスマを受けたのです。パウロの回心は、使徒言行録には3回記されています。ですから、パウロにとって復活のイエス様が、クリスチャンを迫害するような、本来なら裁かれて、切り捨てられて当然の者に出会って下さり、ご自身を示して下さり、異邦人に福音を伝える者として下さったという深い愛に感動し、イエス様のためになれば命を懸けて仕えたいと思ったはずです。まさに、「**キリストの愛がわたしたちを駆り立てている**」、キリストの愛が強く迫っているという原点は、ここにあったのだと思うのです。15節には、「**その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。**」とあります。リビングバイブルには、「**キリスト様は、全人類のために死んでくださいました。それは、キリスト様から永遠のいのちをいただいて生きる人がみな、もはや自分を喜ばせるためではなく、自分のために死んで復活されたキリスト様に喜ばれるように生きるためです。**」とあります。パウロはこの言葉のように、イエス様が自分の罪のために死んで、よみがえって下さった事を信じて、キリストの愛に強く迫られて、自分のために死んでよみがえられたイエス様のために生きる者とされたのでした。そして、それは、私たち一人ひとりも同じだと思うのです。

Ⅲ 結論部

パウロのありのままはずいものがありました。劇的な回心の体験、全てを捨てて命を懸けて宣教したこと、宣教のための旅行を3度も行ったこと、多くの人に福音と伝え、救いに導き、いくつもの教会を建て上げたこと、異邦人に宣教したこと、第三の天にまで上げられた経験があること、多くの教会や人々に手紙を書いたこと、イエス様を伝えるために多くの苦しい経験をしたことなど、パウロの働きには素晴らしいものがありました。しかし、パウロが言う「**ありのまま**」とは、そのような素晴らしい働きというのではなくて、自分の弱さについてのようなのです。イエス様に救われ、イエス様に立てられて福音を伝えている自分には、弱さや足りなさがあることをパウロは実感していたのです。「**わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はあります**

が、それを実行できないからです。」(ローマ 7:15-18) とパウロは語っています。そのパウロが良い事をしているというのです。そこに、神様の栄光が現れているのです。それは、弱いパウロを通して、神様が、イエス様が働いておられるということなのです。パウロは言いました。「すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足していません。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(Ⅱコリント 12:9-10) と証しているのです。パウロがそうであったように、私たちが罪を犯すし、イエス様に喜んでいただけるようなことはできないで、イエス様が心痛めるような事をしてしまう、惨めな私たちですが、その弱さの中に、失敗や、問題のただなかに、イエス様が共にいて、イエス様の力が十分に発揮されるので、弱い私たちでもイエス様の深い愛に迫られて、イエス様の愛に押し出されて、この世にあって、家族や、友人、知人の中にあってイエス様の愛を紹介することができるようになるのです。この週もイエス様の愛が私たち一人、ひとりに強く迫っているのですから、イエス様の愛をいっぱい頂いて、イエス様の愛に励まされて、押し出されて、この世に、家族のもとに、学校や職場の友人、知人のもとに遣わされて行くではありませんか。イエス様が、どんな時にも愛して下さるので、安心して、信頼して歩んでまいりましょう。